

方丈記 第三回

また、治承四年の卯月うづきのころ、中御門京極なかのみかどきょうごくのあたりから、大きなつむじ風が巻きあがり、六条通りのあたりまで吹き抜けたことがあった。三、四町を吹き抜けていくつむじ風に巻き込まれた家は、大きな家も小さな家も、壊れなかった家は一軒もなく、なかには、べしやんこになってしまった家もあれば、桁や柱だけが残っている家もあり、門が四、五町先まで吹き飛ばされた家もあれば隣の家との境にあった垣根が飛ばされて、ひとつ敷地になったものもあった。

ましてや家をかたちづくっていた資材ひわたなどは、数えきれないほど巻き上げられ、屋根に葺かれてあった檜皮や葺き板なども、吹き飛ばされて空に舞い、まるで風の強い冬の日、木の葉が風に乗って乱れ吹き飛ばかのように。塵も煙のように吹き上げられ、あたりは何も見えないというありさま。すさまじい音に、何を言ったところで聞こえるはずもなく、もしかしたら、悪人を地獄へと吹き飛ばし去る風というのは、こういう風のことなのかと思ったりもした。

家が壊れてしまっただけでなく、それをなおそうとして怪我をして、不自由な体になってしまった人も、数限りなくいた。

この風はやがて南西の方に流れて行ったけれども、多くの人に多くの悲嘆を残した。つむじ風はいつだって吹くけれども、これほどの風の吹きようはただ事ではなく、もしかしたらこれは、神仙か何かが、何かを知らしめようとしているのではないかとさえ思ったのだった。